

推しは目の前の先輩です

星井悠里

Yuuri Hoshii

illustration

510



……あーもう、疲れた。

大学の昼休み。賑やかな学食を抜け出したオレ、宮瀬^{みやせ}貴臣^{たかおみ}は、中庭の端にあるベンチに腰を下ろした。

葉の隙間から日差しが零^{こぼ}れる。遠くから誰かの笑い声が聞こえてくるものの、この辺りは人通りが少ない、オレのお気に入りの場所だ。

リュックの奥にある布の袋を指で探る。周囲を確認してから取り出し、中身を手のひらに載せた。

——小さなぬいぐるみ。名前は「先輩くん」。

手のひらに収まるサイズの、憧れの先輩をモデルにした「推しぬい」だ。丸みのある大きめの頭に、ちょこんとしたコンパクトな体。水色のシャツを着

て、おしやれなプレスレットとネックレスも付けている。

つぶらな瞳と微笑んだ口元が、とにかく可愛い。あごの小さなほくろも、ふわりと跳ねた髪も、少し長めの前髪もちゃんと再現してある。

見れば見るほど疲れていた心が癒やされて、自然と頬がゆるんだ。今日も「先輩くん」は、本当に可愛い。

市販品ではなく、オレの手作り。世界にひとつだけのミニチュアで、たくさんの敬意と好意を込めて仕上げた。我ながら傑作だと思う。

大学デビューを果たして陽キヤを演じているオレは、時々どうしようもなく疲れるときがある。そんなとき、この「先輩くん」を見ると、不思議なくらい元気が出る。オレにとつて、お守りみたいなものだ。

このぬいのモデルは、サークルの男の先輩、白川陽彩さん。オレの最推しの先輩だ。

本物の先輩は、眩しいくらいカッコいい人だけど、このぬいはひたすら可愛く作っていて、癒やしの極みなのだ。

指先でそつと頭を撫でると、胸の奥がぽつと温くなる。本人には絶対言えな

いので少しだけ罪悪感があるけれど、それでもやめられなかった。

——オレは、高校まではかなりのコミュ障で、間違ひなく陰キヤだった。似た者同士の友達がいたからそのままでもいいと思っていたけど、高校の卒業式の夜、二歳下の妹の結愛から突然宣言された。

『お兄は全部もったいない！ 背も高いし、超イケオジって言われてるパパに似てるんだから、外見も中身も全部変えて大学デビューしようよ。春休み、私が全力で鍛えてあげるから！』

外見も中身も全部変えちゃうって、それじゃオレじゃなくなっちゃうじゃん。そう思ったが言い返す気力はなく、苦笑するしかなかった。

結愛は昔から可愛くて、おしやれに敏感な人気者だ。いつも陽キヤグループの中心にいて、兄妹でこんなに違うのかと不思議になるくらい、いつも人に囲まれていた。

結愛みたいには無理だよ、と言いながらも、正直オレ自身もこのままじゃまずいと思った。人と臆せず向き合える外見に変わる機会は、たぶん今しかない。

そう思って話に乗った結果、可愛い妹が春休みの間、鬼監督になってしまった。

美容院に連行され、眼鏡を奪われ、声の出し方や歩き方を指導された。おもしろがった母の資金援助のもと、結愛の手で服が一新され、アクセサリーも揃えられた。

四月から二ヶ月弱経って、それらを身につける生活にも少しは慣れてきた。けれど、いまだに鏡の中の自分には違和感があつて、オレってこんなだったつけど時々本気で思うこともある。

でも、結愛の言う通りだった。人つて外見が変わると、中身も少しずつ変わっていく。そしてなにより、周りの見る目が変わる。

入学後、授業のガイダンスが始まると同時に、サークルの勧誘合戦が始まった。学内の至るところで先輩たちが声を張り上げチラシを配り、お祭り騒ぎだった。見た目だけマシになったオレは、歩いていただけでたくさん声をかけられた。派手な女の先輩に「可愛いー！　うちおいでよ」なんて言われて、心の中では「いい」と悲鳴を上げていた。

人生初の勧誘ラッシュは嬉しいよりも怖いが勝っていて、このままだとどこにも入れないかも、と思いはじめたとき――不意にやわらかい声が耳に届いた。

「こんにちは。ね、もうサークル決めちゃった？」

声に惹かれて振り返る。――そこに立っていたのが、白川先輩だった。

先輩の瞳が少し下にある。オレが百七十五センチ超えくらいだから、先輩は百七十くらいだろうか。明るいこげ茶色の髪に、大きな目。ふんわり笑う口元。かなりのイケメンなのに、圧の全然ない優しい顔立ち。

すっごく好き、かも。見た瞬間に思った。

この人、ぬいにしたら絶対可愛い。そう思ったときには、頭の中にぬいの下絵が浮かんでいた。

すぐにでも作りたいと思ったけれど、先輩についていきサークルの説明を聞いた。スポーツや飲み会、合宿をして大学生活を楽しむというサークルだった。先輩の笑顔をずっと見ていたいと思ってしまったオレは、先輩との縁を切らないために、その場で入会を決めた。

その後、活動に参加するようになってから知ったけど、百人近く所属する、大学の中でもかなり大規模なサークルだった。

派手な先輩も陽キャも多くて、オレ的にはかなり場違いだったけど、結局サー

クルをやめずにいるのはそこに先輩がいるからだ。

顔も声も、話し方も仕草も、全部が理想のような人だと思う。

新歓で声をかけてくれたからか、先輩はオレによく話しかけてくれる。先輩に会えると嬉しいし、話しかけられると気持ちが弾む。

昔から、人に対してこんな強い感情を持つことはなかった。女の子にも恋愛的な興味を抱いたことがないし、かといって、男に対しても今まではなかった。

だから、自分はそういう気持ちが薄い人間なんだと漠然と思っていた。別に困らなかったし、深く考えることもなかった。

でも、先輩だけは別だった。

笑顔を見るだけで胸が締めつけられるし、目が離せない。

この気持ちを「恋」と呼ぶのだろうか。正直よく分からないけれど、とにかく憧れているし、好きな気持ちは相当強い。

どうしてそこから、ぬいを作るという行為に向かうかというと、理由は単純、唯一の趣味だからだ。

オレは高校で手芸部に入っていた。女子部員たちがオレのぬいを見て可愛いと

盛り上がり、三年になると部長に祭りあげられた。学園祭ではぬいを販売し、かなり売れたこともあって、ぬい作りにはちよつと自信がある。

とはいえ、男のオレがぬいを作るという時点で気持ち悪がられるかもしれないから、大学では誰にも言うつもりはない。幸い、高校の知り合いは同じ大学にはいないから、バレることもない。

自分でも、男としては変わった趣味だとは思いますが、誰にも迷惑をかけていないから、これくらいいい……かな？ と少しだけ開き直っている。

ひとしきり「先輩くん」を眺めて満足したオレは、ぬいを入れる袋の口を開いた。この袋もオレの手作りで、青空を模したデザインが気に入ってる。

ほっこりとした気持ちで、袋にぬいをしまおうとした瞬間だった。

「よっ、宮瀬」

すぐ後ろから聞こえた白川先輩の声に驚いて、ぬいを落としてしまった。動けずにいる間に先輩が前に回り込み、何気ない動作でぬいを拾ってくれた。

「何か落としたけど……人形？」

先輩が不思議そうにぬいを見ている。まさか先輩の手の中に「先輩くん」がい



るなんて。頭が真っ白になって動けない。

「これ、可愛いね。アニメのキャラ？ 意外。宮瀬ってアニメ見るんだね。どんなの見るの？」

何も言葉が出てこない。だって今、「先輩くん」が、この世で一番いてはいけないところにいるのだから。

できることなら、今すぐ先輩の手からぬいを奪い取って逃げたい。そして一人暮らしのアパートに引きこもって、少なくとも一週間は出たくない。

「オレも好きなアニメあるからさ。言ってみてよ、知ってるかも」

とっさに何か似たキャラを言うべきかとも思ったが、そもそもアニメはほとんど見ないし、先輩に似てるキャラなんて思いつかない。

「なんか、どっかで見た気がするんだよね」

先輩はぬいを持って、いろんな方向から観察している。

「右あごのこれ、ほくろ？ すごい細かいね。オレもあるんだ、右あごに」
言いながら「ほら」と自分の右あごを指さす。

オレはぐっと言葉に詰まった。

……知ってます。だって先輩だから、それ。

心の中でそう言うが、もちろん口に出せるわけもなく、笑みを引きつらせることしかできない。……いや、笑ってる場合じゃない。とにかく返してもらわないと。

「あ。このネックレスもブレスレットも、似たの持ってるかも。水色のシャツ、オレ、今着てるし……って、共通点、多くない？ はは、おもしろ〜」

先輩はのんきに笑っているけど、オレはその場で後ろにぶつ倒れたい気分だ。その水色のシャツ、すごく似合うから、ぬいの服を考えるとそれに決めたんだ。

つか、忠実に再現しすぎた。まさか本人に見られるなんて思わなかったし。

——もう無理だ。ここから消えよう。そして、先輩の目に映らない場所で生きていこう。

オレは立ち上がり、「失礼しました！」と頭を下げてダッシュで立ち去ろうとする。しかし先輩が咄嗟にオレの腕を強く掴んだ。

「ちょっ、と待って。え、何？」

「先輩、すみません、さよなら……っ」

この世の終わりみたいな様子だからだろうか。先輩は、ちっとも離してくれない。気はないらしい。

「何、さよならって。そのトーンで言われると怖いんだけど。どうしたんだよ？」

先輩は、綺麗でかっこいい顔を曇らせて、オレをまっすぐに見つめてくる。

「悩みでもある？ オレでよければ聞くんよ？ ていうか、これ置いてくんなよ」

そう言いながらぬいを差し出してくれたけど、受け取るのに気が引けてしまう。

「あの……よく考えたら、そのぬい、オレが持ってたらかわいそうなので……」

「え？ なに言ってるの？」

「あの、大丈夫です……オレ、消えますけど、チキンすぎて死んだりはできないと思うのでそこは安心してください」

「いやだから、安心できないし……どこに消えるつもりなんだよ？」

自分でも何を言ってるんだろうと思うくらいだから、先輩なんて余計に意味が分からないに違いない。

それでももう、とにかくここから逃げ出したかった。そんなオレを見上げて、先輩は首を傾げる。

「さっきまで超ご機嫌な顔してたから話しかけたんだけど……な、とりあえず、一回座って？ もし悩みとかあるなら、オレでよかつたら聞くれ」

先輩はオレの腕を引いたままベンチに座り、隣に座るよう促してくる。

「とりあえず、これ、ほら持つて」

座ったオレの手のひらに「先輩くん」が帰ってきて、思わずきゅっと握りしめて、おかえり、と心の中で呟いてしまう。

ぬいへの愛情はめちゃくちゃあるので戻ってきたことに安心する反面、これが先輩の手の中にあつたという衝撃は消えそうにない。

「あのさ。ぬいぐるみを持つてたことなら、別に誰にも言わないから大丈夫だよ。ていうか、こういうの鞆につけてる人とかも結構いるじゃん？」

「そう、ですね……」

「それに、その人形、めちゃくちゃ可愛いし、全然いいと思うよ」

確かに可愛くできているとは思う。めいっぱい愛情をこめて可愛く作ったから。そんなことを考えていると、先輩はくすつと笑った。

「ていうか、なんか既視感^{きしかん}があるから余計に可愛く見えるっていうか……」

そこまで言って、不意に先輩が「ん？」と首を傾げた。そうして少し黙ったまま「先輩くん」に視線を向けてくる。

「ていうか、それ……って、そんなわけないか」

そう呟くと、ぬいを見つめながら、んー、と何かを考えはじめた。

その思考を今すぐ止めてほしい。いよいよ本気で消えたくなくなったオレに、先輩は言った。

「あのさ。変なこと聞いていい？」

嫌です。と、心の中で即答したオレをよそに、先輩は続けて聞いてきた。

「……それってさ。オレ、だったり……する？」

的中すぎて言葉が出せないでいると、先輩はすぐに、「なんてね、そんなわけないよね」と冗談めかして苦笑した。

そのまま「そんなわけないです」と言えたら、よかつたのかもしれない……けれど。

——なんだかもう、限界だった。

「ぐふっ……」

耐えられなくなつて、変な声が漏れた。苦笑していた先輩は目をぱちくりさせている。

「ち……っ、ち、がいます、そんなわけ……っ」

我ながら、説得力ゼロの返事だった。それでも、このままやりすごせるだろうか、と一瞬期待したが、そんなはずはなかった。

「いやいや、無理があるでしょ」

先輩は「そっか」と呟くと、考え込むような素振りを見せた。

「ああ……だからさつきから消えるとか言つてたのか。なるほど」

納得したように呟く先輩がどう思っているのかは、表情からはまったく読めない。いつも通りとてもふわふわとしていて優しく、嫌そうにはしていないのが謎だ。

だって、冷静に考えたら、オレってかなりヤバい奴だ。

男の先輩をめちゃくちゃ可愛いぬいにしてお守りみたいに持ち歩いて、可愛がつてニヤニヤして……その上、そんなものを先輩の綺麗な目に触れさせるとかこの世で一番しちゃいけない愚行だよな。

もうこれは、先輩の「人生で気持ち悪い出来事」のナンバーワンを取得したに違いない。

……つか、どうしよう。もし先輩がこういうぬいを見るたびオレのことを思い出して、「キモッ」つてなるようなトラウマになっちゃったら……あああ。

思考がドツボにはまってしまふ。

とそのとき、不意にオレの手から「先輩くん」が抜き取られた。

「え……っ」

空になった手を見つめたあと、恐る恐る先輩のほうを見ると、先輩は太腿の上にぬいをのせて「はは。可愛い」と微笑んだ。

——天使なのかな、この人は。

オレは、自分がやられた側だつたらどう思うか考えてみた。

もし来年、サークルに入ってきた後輩が知らないところでオレのぬいを作り、握りしめて笑っていたら……ぞわぞわするくらい気持ち悪いな。

ぜったいにぬいを没収して、神社でお祓い^{はら}してもらい、二度と作らないという誓約書を書かせるかも。

それくらい引かれてもおかしくないのに、先輩は「先輩くん」に優しく触れて、たとえ社交辞令だったとしても「可愛い」と言ってくれた。

マジで天使なんじゃないかな。気を遣わせてしまったことが申し訳なくて黙っている、先輩はまっすぐにオレを見つめた。

「これ、本当にすごく可愛いと思うんだけど。……って、その顔は、どういう感情なの？」

苦笑しながら、先輩はそう尋ねる。

「かなり気持ち悪いことしてる自覚があるので……」

喉に張りついた言葉をひねり出すと、先輩は「んー」と首を傾げた。

「いや、びつくりはしてるけど、気持ち悪いとは思ってないよ」

——先輩って、なんていい人なんだろう。マジで天使。大天使って、ミカエルって名前だったよな。先輩はミカエル決定だ。いい人すぎる。

「ところでさ、これってそういうサービスがあんの？」

「え？ サービス、ですか……？」

「似顔絵とか送ると、ぬいぐるみにしてくれるサービス、みたいな？」

オレは少し考えて、やがて気づいた。

先輩は、オレがぬいを作ったとは思わず、そういうサービスで、誰かに作ってもらったんだと考えてるのか。

……いや、誰かに作ってもらったのだとしても十分気持ち悪いとは思うけど、オレがせっせと心を込めて作ったよりかはマシなのかもしれない。

それなら、せめてそれを押し通したほうが、いいかも……

「そ……そうなんです、そういうのがあつて……」

「やっぱりそうなんだ。よくできてて、すごいね」

活路を見出したと思ったオレだったが、次の先輩の言葉で硬直してしまった。

「な、そのサービス、教えてくれない？ 実はさ、もうすぐ小学生の従妹の誕生日なんだけど、自分が描いたイラストの女の子を人形にしてほしいって言われてさ。どこで頼むかわからなくて困ってたんだよ。どこで頼んだ？」

「えっと……どこ、だったかな……」

口ごもるオレに、先輩は質問を続ける。

「タグとかもないし、手作りっぽいよね？ ハンドメイドのお店とか？」

先輩があまりに無邪気な顔で話すものだから、嘘を重ねる氣力が急速に萎んでいく。

……だめだ。これ以上ごまかしたら、きっと後悔する。もう作らないって約束して、ちゃんと謝らないと。

「せ……先輩」

「ん？」

覚悟を決めたのに、言葉がつかえてしまう。だって、先輩に気持ち悪がられて嫌なものを見る目で見られたら、あまりに哀しすぎる。

オレが作ったなんて言ったら、今は可愛いか言ってくれてる先輩も、さすがに態度変わるよな。

でも、オレにうまい嘘なんてつけるわけがないんだ。そんなコミュ力があつたら、そもそも本物の先輩と仲良くなれているはずだ。

それができないから、ぬいを作って、小さな幸せを一人で嘸みしめながら癒やされてたんだ。

もう無理だ。言うしかない——そう思ったとき。

「まさか、これ、宮瀬が作ったとか？」

先輩が鋭いのか、それとも今の状況だと普通に考えつくことなのか、とにかくずばりと正解を言い当てられてしまった。

こうなったら、潔く認めるしかない。

オレは、先輩の顔を見られないまま小さく頷いた。

「え、マジでそうなの？」

先輩が改めて「先輩くん」を観察する氣配を感じて、オレはいたたまれなくなつて、勢いをつけて立ち上がった。

「本当にすみませんでした。気持ち悪すぎて先輩のトラウマにならないように祈ってます。二度と作らないと約束するので、オレのことは忘れてください！」

「は？ ちょっと、待っててば！」

頭を下げて走り出そうとするが、また腕を掴まれてしまった。

「なんなのほんと、大学から消えるつもり？」

先輩はおかしそうに笑う。

「大丈夫だから。別にそこまで気持ち悪くないし。とりあえず落ち着いて」

先輩が笑みを浮かべて、腕を掴んだまま「ね？」と下から見上げてくるのを見て、息が詰まる。

——ヤバイ。可愛い。

いや、マジでオレは馬鹿なのか、何言ってるんだ。可愛いとか、そんな場合じゃないだろ。

なんかもう顔が熱い。真っ赤かもな。いや、でも血の気が引いてるから真っ青かも。……いやもはや、紫かもしれない。息もまともにできている気がしない。手は冷や汗でびっしょりだ。

「とにかく座って。消えなくていいから」

促されて、仕方なくもう一度腰かけた。もちろん先輩からはできるだけ離れて。

「あの、でも……」

気持ち悪いですよ、と言いかけると、先輩が言葉を遮るように手を伸ばしてきた。

殴られるのかと思ったが、オレの頭にはふわっとした感触。そのまま、くしゃくしゃと優しく撫でられた。

「よしよし。落ち着けよ。平気だから」

え、今……撫でられた？

オレは、ぎゅっと太腿の上で手を握ったまま固まる。

なにこれ……落ち着くなんて無理だ。オレ、今なら死んでも悔いはないかも。

「っていうか、もうこれプロレベルじゃん。うますぎるんだけど、なんで？」

先輩の話し方からは、嫌だとか、気持ち悪いとかの感情を感じない。

ただ純粹に不思議そう。オレは少しだけ先輩の顔を見てから俯いて、心を決めた。

——もうここまで来たら、隠すのはやめよう。

「小学生のとき、妹にフェルトのおにぎりを作ったのがきっかけで、趣味で続けているんです。高校では手芸部でした」

「へえ、すごいね。趣味の域は超えてるよね。普通に売れそう」

……気持ち悪がるどころか、褒めてくれている？ 頭の中が、はてなで埋め尽くされる。

「オレ、これ好きだなあ。今まで見てきたこういうぬいぐるみの中で、一番可愛

い。オレの別バージョンとかも作ってたりするの?」

……作っていても、いいんだろうか。

そんなはずはないのに、そんな風に受け取れるような言い方をするから、勘違いしそうになる。

「いえ……先輩はこれだけです。他は、妹に作ったのとか、部活で作ったのとか」

「えー、見たいな。可愛い、たくさんありそう」

先輩はにっこり笑ってから、ふと時計を見て、「あ、もうすぐ授業だ」と呟いた。

——そうだ、昼休みだった。永遠に続く地獄のように感じていた。

「な、宮瀬」

「は、はいっ!!」

「黙って作ってたのは良しとするからさ。そのかわり、他のも見たいな。宮瀬って一人暮らしでしょ? 今日、暇?」

「はい……え!？」

視線を上げると、先輩が期待を含んだ瞳でオレを見つめていた。

「あのさ。今日、行ってもいい?」

「どこに、ですか?」

「宮瀬んち。行ってみたいんだけど」

楽しそうに話す先輩に、頭が真っ白になる。

「やっぱり急にはだめ?」

「いい、です、けど……」

「やった。決まりな」

キラキラの笑顔があまりに眩しくて、呼吸がうまくできない。

先輩がオレの家に来るなんて、あまりに現実感がなくて頭が追いつかない。ついさっきまで、今すぐ消えたいって思ってたのに、なんでこんな展開になってるんだろうと、頭の中はパニックだ。

「宮瀬、今日何限まで?」

「ご、五限ですけど」

「オレも。じゃあ終わったら正門で待ち合わせな」

先輩は手の中の「先輩くん」を見つめ、それからオレを見て笑う。

「それまでこの子、人質に預かってくね。……じゃ、オレ次の校舎遠いから、先

に行くね」

そう言って、明るく手を振って走り去っていった。

先輩が見えなくなるまで、オレはただ呆然とその後ろ姿を見送っていたけれど、少しして我に返った。

え……今のって、なに？ 先輩がうちに来るって……？

夢かなって思ったけれど、さっきまであった「先輩くん」がいない。人質に取られたのは間違いないから——どうやら夢ではないみたいだ。



午後の授業は全く頭に入ってこない。辛うじてノートはとっているけど、文字をただ羅列しているだけだ。

さっきのお昼休みのことが本当に現実だったのかと疑ってしまうけれど、いろんな表情の先輩を思い出せるから、やっぱり現実なのかもしれないと思ひ直す。

近くでたくさん見た先輩。可愛かったなあ……

ノートの端に先輩の絵を描きそうになって、はたと手を止めた。

……つか、先輩がオレの部屋に来る？

あれ？ うち綺麗だっけ？ 掃除機いつかけたかな。とりあえず、洗濯物を押し入れに突っ込めば綺麗になるかな。ああでも、裁縫道具とか作りかけのぬいとかが広げたままだから、テーブルの上がヤバイかも。

断る選択肢が、一瞬よぎる。先輩は無理強いするような人じゃないから、やっぱり今日は無理ですと言えば納得してくれるはず。

でも、先輩がオレの家に來てくれるなんて奇跡は二度とないかもしれない。できるなら、ぬいのことをもう少しちゃんと話せたら嬉しいし、ただ純粹に、先輩と二人で話せる時間が欲しい。

……だから、断れないんだよな。

さっき先輩は、オレのぬいを可愛いつて褒めてくれたし、他のぬいも見たいって言ってくれた。

やっぱり、すごくいい人だ。もっと仲良くなれたら……って、図々しいか、オレ。とりあえず今日優先するミッションはひとつだ。気持ち悪い先輩というイメー

ジを少しでも消すこと。

まず、帰ったら急いで掃除だな。そう決意して、頭に入らない授業が終わるのをひたすら待った。

五限終了と同時に、一緒に受けてた友達に別れを告げて教室を飛び出した。普段のオレじゃ考えられないスピードだったからか、「おお？ どした？」なんて声も聞こえたけど、先輩を待たせるわけにはいかなからスルーした。遅れたら先輩が帰ってしまうかも。そう思うと、さらに足が速くなる。

「あ、宮瀬」

先輩はちゃんと正門で待っていてくれた。しかも、にっこり笑顔だ。オレは先輩のもとに駆け寄った。

「すみません、お待たせして。早いですね、先輩」

「今日はたまたま教授が十分前に終わらせてくれたんだよ」

「そんなに待ってくれてたんですか……？」

「だって約束したじゃん。っていうか、たかが十分なんて待つうちに入らないよ」先輩はきょとんと不思議そうにする。それを見て、なんだか胸がぎゅっと締め

つけられた。

さっきの約束、ちゃんと現実だったんだ……なんて感動しながら、先輩と一緒に歩きはじめる。

「オレ、今すごい楽しみなんだけど」

一緒に並んで歩くだけでもすごいのに、笑顔でそんなふうに言ってくれる。オレは自分の部屋を思い起こして、困って首を傾げた。

「そんなにたいしたものはないですよ」

「そう？ でも、楽しみ」

先輩の目元がほころぶ。可愛い笑顔にドキドキしていると、先輩は笑みを深めた。

「そういえば、手芸部って女子ばかりだね。モテた？」

「いえ。少しも」

即答すると、先輩は「えっ」と驚いた顔を見せた。

「そうなの？ モテそうなのにな」

不思議そうな先輩に、曖昧に笑って肩を竦めた。

先輩は、結愛に改造されたオレしか見てないから、そんなふうに言ってくれる

のだろうけど、オレは高校時代、モサモサの代表みたいな奴だったから、モテるわけがないのだ。

他愛のない話をしながら歩いていると、不意に先輩が、通りがかった弁当屋の前で立ち止まった。

「お弁当買ってこ？ お邪魔するし、オレが出すよ」

「えっいや……」

「遠慮しないで。ここ、安そうだし」

「……でも」

何度か押し問答をした末、結局おごってもらうことになってしまった。

オレは唐揚げ弁当、先輩はハンバーグ弁当を手に、また歩き出す。そのあとコンビニの前を通りがかったとき、オレはあることを思いついた。

「あの、飲み物、買いませんか？ ここはオレが出すので。えっと……来てもらう、お礼、です」

「えーいいの？ ありがとう」

軽く言って微笑む先輩。

さっきの弁当ではあんなに押し問答してしまった自分とは違って、こうして素直に受け取ってくれる感じが、やわらかくてすごく好きだな、と思う。

麦茶と炭酸のペットボトルを持ってレジに行く途中、先輩がプリンの前で足を止めた。

「プリンも買いますか？」

そう尋ねると、ふふ、と先輩が嬉しそうに笑う。なんだか心からほっこりしながら、オレもコーヒージェリーを手にとって、一緒に会計を済ませた。

「結局お弁当と同じくらいになってない？」

先輩は苦笑するけれど、オレは首を横に振る。来てくれるだけで嬉しいし、なんなら弁当もオレが出したいくらいだ。

それから少し歩いてアパートに着くと、オレは部屋の前で先輩を振り返った。

「ちょっと掃除したいので、五分だけ待っててもらえますか？」

「全然気にしないよ？」

首を傾げた先輩に、「すみません」と伝えると、すぐに先輩はにっこりと笑った。「ん、分かった。待ってる」

その笑顔に少しほっとして、もう一度「すみません」と言いながら、オレは鍵を開けて中に入った。

オレの部屋は1DKで、入ってすぐ細い廊下があり、右側に寝室、奥にキッチンつきの部屋がある。一人暮らしには十分な広さだ。

普段からそこまで散らかってはいないが、先輩を迎えるとなると綺麗に片付けておきたい。洗濯物や出しっぱなしだった裁縫道具を急いで片付けて、最後にざっと掃除機をかけた。

「お待たせしました」

急いでドアを開けると、先輩は誰かと電話で話していた。先輩はオレと目が合うと、微笑んでから少し俯いた。

「うん。今日は用事があって……遅くなるかもしれないからやめとく。ごめん、またね」

先輩は電話を終えると、「お待たせ」と言いながらオレを見上げて微笑んだ。

「掃除終わった？」

「はい、お待たせしました。先輩、電話、大丈夫ですか？」

「うん、カラオケに誘われただけ。もう入っていいの？」

「あ、はい、どうぞ」

先輩は「お邪魔しまーす」と言いながら中に入ると、靴を脱いで、きちんと揃えた。

……ちゃんと揃えるんだなあ。

たったそれだけのことだけど、好感度がグッと上がった。

「手、洗わせて？」

「あ、そこが洗面台です。このタオル、使ってください」

「うん。ありがと」

新しいタオルをかけてから先に部屋に戻り、綺麗にしたばかりのローテーブルに弁当と飲み物を並べて、デザートを冷蔵庫に入れた。

お茶を淹れながら、心臓のバクバクを必死に抑え込んでいると、先輩が部屋を見回しながら入ってきた。

「あ。先輩、そちらにどうぞ。えっと……もう食べますよね？」

若干挙動不審になりながら、奥の席を案内すると、先輩は「うん、ありがと」と、柔らかに微笑みながら座ってくれた。

二人で向かい合って弁当を食べる間も、ずっと憧れていた先輩が今、自分の家にいるという現実が信じられなくて、弁当の味がわからない。

先輩は弁当を口に運びつつ、興味津々といった様子で部屋を見渡している。隅に寄せた手芸道具や、作りかけのぬいたちを見つけたようで、目がキラキラと輝いている。

「あの……あんまり見ないでもらえると……」

「あ、ごめん。あんまり作ったもの、見られたくないよね」

「いや、違って……ごちゃごちゃしてて恥ずかしいので」

「え、そっち？　なんか工房みたいですよーってと思ってたよ」

素直な褒め言葉が嬉しいけれど、とっさに返事ができない。

ここはオレの「好き」が集まっている大事な場所だ。でも、男がぬいをつくるのはやっぱり珍しいだろうし、そこをよりによって憧れすぎている推しの先輩に見られるとか……褒めてくれているとしても、かなり恥ずかしい。

「あつ、そうだ」

先輩は思い出したかのように言うのと、隣に置いていた自分の鞆から「先輩くん」

を取り出した。

「人質にしてごめんね」

にっこり微笑む先輩の手から、遠慮しながらもぬいを受け取ると、先輩は何事もなかったかのような顔でまた弁当を食べはじめた。

オレは固まったまま、「先輩くん」を握りしめる。

「先輩、あの……これ、オレが持つてて、平気ですか？」

「ん？　どういう意味？」

じつと見つめられて言葉に詰まる。

一度唇を噛んでから、思いきって聞いてみた。

「オレがこれを持つてて……気持ち悪くないですか？」

「ああ、そういう意味か。んー……」

先輩は少し考えこみ、やがてオレを見つめながら、ふ、と微笑んだ。

「なんでオレのぬいぐるみ作ったのか、聞いてもいい？」

ド直球の質問に、またも言葉に詰まった。

世間話や会話に困ったときの話題は、結愛にいろいろ仕込まれている。

でも、こういう大事なときに使う言葉は、やっぱり自分が持つてゐるものを出さない。なんだか、オレのコミュ障がまだ全然直ってないのを痛感する。

「実はオレ……高校までめちゃくちゃコミュ障だったんです、陽キャの妹に、変身させられて、大学デビューしたんですけど」

先輩は黙ったまま、頷いてくれている。

「髪型や服装を変えて、コンタクトにして……話し方とかも練習して、それで外見とかは多少はマシになったんです。けどまだ人と長く話すと結構疲れるときがあつてですね……でも先輩だけは、会ったときからすごく話しやすく、長く話しても疲れないんです」

「それは嬉しいかも」

「先輩はカッコいいですし、陽キャの人たちの中心にいるのに、穏やかで優しく……憧れなんです」

ここまで言っただから、もう全部話してしまおうと覚悟を決めた。

それでも顔は見られなくて、先輩のネックレスを見つめながら続けた。

「それで、先輩のぬいを作ってお守りにしてました。すごくうまく作れたのもあつ

て、見てると安心するし勇気をもらえて……先輩みたいに自然体で頑張ろうって思えるんです」

そこまで話して、オレは俯いた。

——ちょっと待て。……オレ、なんか告白したみたいになってないか？

つか、これ以上何を話せばいいんだろうか。えーと……

「コミュ障っていうわりには、そこはすらすら話したね？」

やわらかい雰囲気先輩が言う。

オレは少し顔を上げて、小さく頷いた。

「本心なら、頑張れば話せます。人に合わせて話すのが苦手というか」

「ふうん……そっか」

先輩はあごに手を当てて、んー、と考えこむ。

「なんとなくは理解した。ひとまず嫌な感じでは受け取ってないから安心して。でもちょっと考えたいことがあるから……とりあえず、食べちゃおっか」

にこ、と先輩が笑うので、オレも自然と少し笑みがこぼれた。

こんなよく分からない告白のあとでも、先輩は優しい。

「なあ、唐揚げとハンバーグ、交換しない？ 食べかけだけど、そっち側から取って」

「交換じゃなくてもいいですよ。取ってください」

「えー、交換しようよ。ハンバーグ嫌い？ それとも潔癖けつぺきだったりする？」

「ハンバーグは好きですし、潔癖でもないです。先輩ですし」

「……………」

ん？ 先輩、止まってる？ ……あ、ヤバ。また変なこと言ったかもしれない。

「あ、変な意味じゃなくて、先輩が汚いわけないというか。いや、ほんとに変な意味じゃないんですけど……」

言えば言うほど怪しくなる。焦り出したとき、先輩が、ははっと笑った。

「分かってるよ、焦るのがおもしろくて」

「っ……本気で焦るので」

「はいはい、ごめんね」

先輩は軽い口調でそう言うのと、弁当を置いてオレをまっすぐに見た。

「宮瀬ってルックスいいのに、どうしてそんな感じなのかなあ、って思ってたんだ」

ルックスいいって先輩に言われるのは嬉しくて、心臓が変な音を立てる。いや、反応すべきは「そんな感じ」のほうかも？ なんだかどっちも気になりすぎて、咄嗟に言葉が出てこなかった。

すると、先輩はおもしろそうに目を細める。

「どっちに引かなかった？ ルックスと、そんな感じって言葉」

「どっちも、です」

正直に答えると、先輩は口角を少し上げた。

「どっちも引かなかった、固まっちゃった感じ？」

先輩の視線がじっと向けられ、心の中で見透かされそうでドキドキする。バレすぎて恥ずかしいけど実際その通りなので仕方なく頷くと、先輩は、そっか、と静かに笑った。

「宮瀬ってさ。なんだろうな、なんか少し変わってるなあって思ってたんだ」
変わってる、という言葉にちよっとドキツとする。変な奴ってことだろうか、
と思っていると、先輩は続けた。

「宮瀬のこと、かっこいいって言ってる子は結構いるし、オレもそう思うんだけ

どさ。そんな顔してたらもつとノリのいい奴になってそうなのに、すごく穏やかでさ。どっちかっていうと静かじゃん。あとほら、今日の昼も姿消すとか言い出すし。やっぱり少し不思議だなと思ってたんだけど」

どうやらオレは今、周りから「それなりに陽キャなイケメン」だと思われているらしい。

結愛のおかげで少しはそう振る舞えているけど、本当のオレは違う。

先輩には、それがバレていたのだろうか？

「あの……先輩って、絶対陽キャですよ？先輩にはオレが陰キャに見えてましたか？」

「え、陰キャ？んー……」

先輩は少し考えるように視線を落としながら、口を開いた。

「オレも、自分が陽キャかって言われると微妙なんだけど……まあ陽キャ陰キャとかじゃなくてさ、宮瀬はかっこいいけど、中身は控えめじゃん。もう少し自信を持って生きてもいいんじゃないのかな、って思ってたんだよ」

「……なるほど。あ、オレにとって先輩は絶対的にイケメンで陽キャの人気者な

んですけど」

「え、そう？って、なにこれ。褒めあつて、おかしいね」

照れた先輩の笑顔を見ると、可愛いなと思ってしまう。

「でも不思議に思ってたから、コミュ障から大学デビューしたって聞いて、なんかすごく納得した」

ふ、と微笑む先輩に、オレがなんとも答えられずにいると、先輩は「ちょっと話、中断しよ」と言って弁当を差し出してきた。

「ハンバーグ切るから取って」

「あ、ありがとうございます」

切ってくれたハンバーグを箸でとり、かわりに弁当を差し出す。

「先輩も唐揚げどうぞ」

「うん。ありがと」

唐揚げを取って口に入れた先輩は、嬉しそうに笑った。

「うま。唐揚げ」

お互いに顔を見合わせて頷くと、それからは静かに弁当を食べ進めた。

——てか、先輩ってオレの外見じゃなくて中身を見てくれてたんだ。

そう思った瞬間、どうしようもなく嬉しくなってきた。箸が止まる。弁当から視線を上げると、先輩の綺麗な目と目が合った。特に何も言わず、先輩は、にこっと微笑んでくれた。

弁当を食べ終えて「ごちそうさまでした」と手を合わせると、先輩と声が重なった。そんな小さな偶然が、この上なく嬉しい。

弁当を片付けてから、麦茶をひと口飲む。緊張してるのか、喉を通る冷たさがさつきよりも沁^しみだ。

なんだかずつと鼓動が速い気がして困っていると、先輩はオレに向き直って座り直した。

「な、宮瀬。さっきの話で思ったこと、言っている？」

「……はい」

オレも背筋を伸ばして座り直すと、先輩は「力抜いて」と苦笑した。

「まずさ。宮瀬がオレを憧れって言ってくれるのは嬉しい。って言っても、オレ、別にたいした奴じゃないけど」

「そんなこと、ないです」

そう返したものの、それ以上なんと言おうべきか分からずに黙っていると、先輩はいつもの笑顔でオレを見つめた。

「さっきの話を聞いても、宮瀬のことを気持ち悪いとは全然思っていないから安心して」

「ほんと、ですか？」

「ほんと。オレも先輩に憧れたことがあるから、そういう気持ちは分かるし。それに、こんなに上手にぬいぐるみを作れて、すごいと思うよ」

先輩の視線は嘘を言ったり誤魔化したりしているわけではなさそうで、オレは少し安心して頷いた。

「手芸はただ長くやってたから、上手くなっただけなんですけど」

「それがすごいんだよ。SNSとかやったら人気出るんじゃないかな」

「そんなに甘くないとは思いますが……」

「欲しい人はいると思うけどなあ……あ、そうだ。作ってるのを見せてよ」

……そうだ、他のぬいを見るために家に来てくれたんだった。

オレは近くに置いていた完成品のぬいをいくつか手に取り、テーブルに並べた。楽しそうにする先輩を見てると、気持ちがふわりと浮き立つ。

他にも作りかけのものや型紙を見せながら説明していると、先輩は「これ可愛い」とか「おもしろい顔してる」とか、すごく楽しそうに聞いてくれた。

——ほんと、優しい人だな。

心の中が、温かいもので満たされていく。

オレは、さっき途中になってしまった質問を、もう一度ちゃんと聞くことにした。

「あの……本当にオレ、先輩のぬいを持っててもいいんですか？」

「ん？ ああ、いいよ。別にオレの許可がいるものでもないでしょ」

くすつと先輩は笑うが、本当にそうだろうか、考えてしまう。

先輩が知らないなら許可をとりようがないけど、知られているなら、やっぱり

許可はいるでしょ……と思っていると、先輩は苦笑しながら優しく首を傾げた。

「大事にしてくれるならいいよ。って、オレが言うのも変だけど」

「それはもちろん、めちゃくちゃ大事にします」

思わず言い切ると、先輩はきよとした顔で目を見開いた。

はつと我に返ると、冷や汗が吹き出る。もしかして、またしても気持ち悪いセリフだった？

——オレって本当に、口にしてから後悔することが多い。だから、しゃべるのが苦手なんだ。

言い訳したくても、なんて言えはいいのか分からず困っていると……

「……っ、あはは」

先輩が「もう無理ー！」と言いながら、肩を揺らして笑いはじめた。

それからしばらく笑ったあと、テーブルの上の「先輩くん」を持ってオレに差し出す。

「宮瀬の好きにしていいいよ」

とっさに出したオレの手のひらに、そつと「先輩くん」が置かれる。

「可愛がつてあげてください」

やわらかく細められたその目を見るなり、胸が弾んだ。死ぬほど先輩が可愛く見えてしまって、心の中でめちゃくちゃ悶^{もた}えている。

なんだ、これ。心臓って、こんなに速く動くことあんのか。

「あ……ありがとうございます」

ぬいをそっと握りしめる。一生大事にします、なんてヤバそうだから言わないけど、確実にそんな気持ちだった。

先輩は微笑んで頷くと、作品箱の中に目を向けて、山盛りに入ってるぬいをこそこそ漁りはじめた。

「ほんとにごちゃごちゃしてて、すみません」

「なんで謝るの？ わくわくしてるのに」

先輩は箱の中を覗きこみながら、宝箱でも漁るみたいに目をキラキラさせる。

「この中のやつ、全部、宮瀬が作ったんだよね？ すごいね！ ね、このマントの刺繍しゅうみたいなのは？」

「これもオレが……」

「えっ刺繍もできるの!? 綺麗」

刺繍とか気持ち悪いかな、と少し不安になったけど、先輩は感心したように声を上げるだけで、そんな感じは一切しなかった。

「ほんと、作るだけなんて、もったいない気がするね」

しみじみと言いながら、先輩は箱の中から作り途中の女の子のぬいを取り出した。

「これ、可愛いけど、作り途中なの？」

「途中で他のキャラがいいって妹に言われて、そのままになっちゃってます」

結愛が好きだった、マントをつけたヒロインのぬい。作りかけだけど、可愛いって言ってもらえて嬉しい。

「妹ちゃんは、何歳なの」

「今高二です」

「二つ下の妹ちゃんに、ぬいぐるみを作ってあげてたんだけ」

「そう、ですね。裁縫を習った五年生のときに、おにぎりやクマを作ってあげたらすごく喜んでくれて……それからずっと作ってきました」

昔のことを思い出しながら話すと、先輩は目を細めた。

「仲良しだね。妹ちゃん、どんな子？」

「仲はいいですけど、全然タイプ違うし、妹のほうがしっかりしてますね」

そう答えた瞬間、突然インターホンが鳴った。来客も荷物も予定はないはずだ

けど。

会話を水を差された気分になりながら玄関に近づくと、「お兄〜？」という聞き慣れた声がした。

「えっ、結愛？」

ドアを開けると、本当に結愛だった。見慣れた白いセーラー服を身につけた結愛は、さらさらのロングヘアを揺らしながら、オレを見て顔をほころばせた。

「よかった〜、いてくれて！ 今日のお昼からずっと連絡してたのに返事くれななんだもん！ 一か八かで来ちゃった」

そういえば、全然スマホなんて見てなかった。お昼からそれどころではなかったからな。

「ごめん。今日全然スマホ見てなくて……急にどうしたんだ？」

「あのね、明日この近くの学校で英語の外部テストを受けるんだけど、朝早くてさ。お母さんと話して、お兄のところに行けばいいじゃんってことになったんだ。明日朝一で出てくから、今夜泊めて？」

おねがい、と手を合わせて結愛はさっさと靴を脱ごうとしたが、先輩の靴に気

づいて動きを止めた。

「あれ？ 誰か来てるの？」

「ああ、大学の先輩が……」

そう言ったとき、先輩が部屋から出てきて、こちらにやってきた。

「こんばんは」

先輩の顔を見て、結愛が「おお」と変な声を出す。

「わあ……めっちゃイケメンですね！」

第一声がそれだった。オレ、ほんとにこいつと兄妹なんだろうか。少なくともオレは初対面でそんな風には言えない。

先輩も少しびっくりした顔をしてから、ふ、と微笑んだ。オレは少し慌てて紹介を始めた。

「先輩、妹の結愛です。結愛、こちらはサークルの先輩で、白川陽彩さん」

「わ、お名前も素敵ですね！」

感心する結愛に、先輩は「結愛ちゃんも可愛い名前だね」と笑い返している。うん。コミュ強同士の会話は安心感があるな……オレは入れないけど。

「すみません。お兄の部屋に誰か来てるなんて全然思わなかったので、押しかけちゃって」

オレに友達がいらないみたいな言い方はやめてほしい。まあ実際泊まりに来るような友達はいないけど、でも少しはいるからね……なんて思っていると。

「えっとお兄……私、帰ったほうがいい？」

結愛が不安げに目尻を下げて言うので、オレはすぐに首を振った。

「こんな時間から帰んなくていいよ」

「うん、ありがと。……えっと、陽彩先輩って呼んでいいですか？」

「いいよ。じゃあオレも、結愛ちゃんって呼んでいい？」

「もちろん！」

会って数十秒で名前呼びとか陽キャすぎる。

先輩と知り合って二ヶ月。同学年の気安い奴らが「陽彩先輩」と呼ぶ中、オレはきっかけがつかめず、まだ呼べていないのに……

可愛くて大事な妹だけど、一瞬、すごく羨ましく思ってしまう。

「むしろオレが帰ったほうがいいよね」

先輩の突然の言葉に、心の中は大騒ぎだ。

まだいてほしい。でも帰らないでと言えずにいると、結愛があっさり言ってくれた。

「帰らないください。せっかくだから陽彩先輩とお話したいです。それにお兄も、帰ってほしくなさそうですし」

よく言った結愛。——オレには絶対に言えない。

先輩が「そう？」と聞いてくるので、オレは慌てて頷いた。

「むしろ先輩も一緒に泊まりませんか？　って、ここお兄んちですけど」

あはは、と笑いながら、結愛は靴を脱いで洗面所に入った。

「すみません先輩。結愛、遠慮なくて。よく友達とお泊まり会をするみたいで、あんまり気にしてなくて」

「全然いいよ。……あのさ、オレ今日と明日、暇だよ？」

「え？」

意味が分からず聞き返すと、ちようど結愛が戻ってきた。

「え、陽彩先輩、泊まれるんですか？」